

芥川龍之介

きりしとほろ

上人伝



きりしとほろ上人伝

小序

これは予が嘗て三田文学誌上に掲載した「奉教人の死」と同じく、予が所蔵の切支丹版「れげんだ・おうれあ」の一章に、多少の潤色を加へたものである。但し「奉教人の死」は本邦西教徒の逸事であつたが、「きりしとほる上人伝」は古来^{あまね}沿く^{しやうにんでん}歐洲天主教国に流布した聖人行状記の一種であるから、予の「れげんだ・おうれあ」の

紹介も、彼是相俟つて始めて全豹を彷彿する事が出来るかも知れない。

伝中殆ど滑稽に近い時代錯誤や場所錯誤が続出するが、予は原文の時代色を損ふまいとした結果、わざと何等の筆削をも施さない事にした。大方の諸君子にして、予が常識の有無を疑はれなければ幸甚である。

一 山ずまひのこと

遠い昔のことでおぢやる。「しりあ」の国の山奥に、

「れぷろぼす」と申す山男がおぢやつた。その頃「れぷろぼす」ほどな大男は、御主おんあるじの日輪の照らさせ給ふ天あめが下はひろしと云へ、絶えて一人もおりなかつたと申す。まづ身の丈は三丈あまりもおぢやらうか。葡萄蔓えびらかづらかとも見ゆる髪の中には、いたいけな四十雀しじふからが何羽とも知れず巢食うて居つた。まいて手足はさながら深山みやまの松檜にまがうて、足音は七つの谷々こだまにも舂こするばかりでおぢやる。さればその日の糧かてを猟あさらうにも、鹿熊などのたぐひをとりひしぐは、指の先の一ひねりぢや。又は折ふし海みべに下り立つて、すなごらうと思ふ時も、海松房みるぶさほ

どな髯の垂れたおとがひ顚おとがひをひたと砂につけて、ある程の水を一吸ひ吸へば、鯛も鰹も尾お鰭ひれをふるうて、ざはざはと口へ流れこんだ。ぢやによつて沖を通る廻船さへ、時ならぬ潮のさしひきに漂はされて、水夫かこ楫取かんどりの慌あわてふためく事もおぢやつたと申し伝へた。

なれど「れぷろぼす」は、しやうとくこころね性得心根のやさしいものでおぢやれば、山ずまひのそま杣かりうど獵夫は元より、往來の旅人にも害を加へたと申す事はおかへりない。反かへつてそま杣きの伐りあぐんだ樹は推し倒し、かりうど獵夫の追ひ失うた毛物けものはとつておさへ、旅人の負ひなやんだ荷は肩にかけて、なにかと親

切をつくいたれば、遠近をちこちの山里でもこの山男を憎まうずものは、誰一人おりなかつた。中にもとある一村では、羊飼のわらんべが行き方知れずになつた折から、夜さりそのわらんべの親が家の引き窓を推し開くものがあつたれば、驚きまどうて上を見たに、箕みほどな「れぷろぼす」の掌たなごころが、よく眠入ねいつたわらんべをかいのせて、星空の下から悠悠と下りて来たこともおぢやると申す。何と山男にも似合ふまじい、殊勝な心映えではおぢやるまいか。

されば山賤やまがったちも「れぷろぼす」に出合へば、餅や酒

などをふるまうて、へだてなく語らふことも度々おぢや
つた。さるほどにある日のこと、そま 杣の一むれが樹を伐ら
うずとて、ひやま 檜山ふかくわけ入つたに、この山男がのさの
さと熊笹の奥から現れたれば、もてなし心に落葉を焚い
て、徳利の酒を暖めてとらせた。そのしづく 滴ほどな徳利の
酒さへ、「れぷろぼす」は大きに悦んだだけしきで、頭の
中に巢食うた四十雀にも、は 杣たちの食み残いた飯をばら
まいてとらせながら、大あぐらをかいて申したは、
「それがしも人間と生れたれば、あつぱれ功名手がらを
も致いて、末は大名ともならうずる。」と云へば、杣た

ちも打ち興じて、

「道理ことわりかな。おぬしほどの力量があれば、城の二つ三つも攻め落さうは、片手業かたてわざにも足るまじい。」と云うた。その時「れふるぼす」が、ちどもの案ずる体ていで申すやうは、

「なれどこに一つ、難儀なことがおぢやる。それがしは日頃山ずまひのみ致いたいて居れば、どの殿の旗下はたもとに立つて、合戦を仕つかまつらうやら、とんと分別つはものを致さうやうもござない。就いては当今天下無双の強者と申すは、いづくの国の大将でござらうぞ。誰にもあれそれがしは、その

殿の馬前に馳^はせ参じて、忠節をつくさうずる。」と問うたれば、

「さればその事でおぢやる。まづわれらが量見にては、
今天^{あめ}が下に『あんちおきや』の帝^{みかど}ほど、武勇に富んだ
大将もおぢやるまい。」と答へた。山男はそれを聞いて、
斜^{ななめ}ならず悦びながら、

「さらばすぐさま、打ち立たうず。」とて、小山のやうな身^{おこ}を起いたが、ここに不思議がおぢやつたと申すは、頭の中に巢食うた四十雀が、一時にけたたましい羽音を残いて、空に網を張つた森の梢^{こずえ}へ、雛も余さず飛び立

つてしまふた事ぢや。それが斜に枝を延いた檜のうらに上つたれば、とんとその樹は四十雀が実のつたやうぢやとも申さうず。「れぷろぼす」はこの四十雀のふるまひを、訝いぶかしげな眼で眺めて居つたが、やがて又初一念を思ひ起いた顔色で、足もとにつどうたそま杉たちにねんごろな別をつげてから、再び森の熊笹を踏み開いて、元来たやうにのしのしと、山奥へ独り往いんでしまふた。

されば「れぷろぼす」が大名にならうず願望がことは、間もなく遠近をちこちの山里にも知れ渡つたが、ほど経て又かやうな噂が、風のたよりに伝はつて参つた。と申すは国ざ

かひの湖で、大ぜいの漁夫^{れうし}たちが泥に吸はれた大船をひきなづんで居つた所に、怪しげな山男がどこからか現れて、その船の帆柱をむずとつかんだと見てあれば、苦もなく岸へひきよせて、一同の驚き呆れるひまに、早くも姿をかくしたと云ふ噂^{やまがっ}ぢや。ぢやによつて「れぷろぼす」を見知つたほどの山賤^{いよいよ}たちは、皆この情ぶかい山男が、愈^{いよいよ}「しりや」の国中から退散したことを悟つたれば、西空に屏風を立てまはした山々の峰を仰ぐ毎に、限りない名残りが惜しまれて、自^{おのづか}らため息がもれたと申す。まいてあの羊飼のわらんべなどは、夕日が山かげに沈ま

うず時は、かならず必村はづれの一本杉にたかだかとよぢのぼつて、下につどうた羊のむれも忘れたやうに、「れぷろぼす」恋しや、山を越えてどち行つたと、かなしげな声で呼びつづけた。さてその後「れぷろぼす」が、如何なる仕合せにめぐり合うたか、右の一条を知らうず方々はまづ次のくだりを読ませられい。

二 俄大名のこと

さるほどに「れぷろぼす」は、難なく「あんちおきや」

の城裡じやうりに参つたが、田舎の山里とはこと変り、この「あ
 んちおきや」の都と申すは、この頃あめ天が下に並びない繁
 華の土地がらゆゑ、山男が巷ちまたへはいるや否や、見物の
なんによおびただ男女なんによおびただ夥しうむらがつて、はては通行することも出来ま
 じいと思はれた。されば「れぷろぼす」もとんと行かう
 ず方角を失うて、人波に腰を揉もまれながら、とある大名
 小路の辻に立ちすくんでしまつたに、折よくそこへ来か
 かつたは、帝みかどの御輦ぎよれんをとりまいた、侍たちの行列ぢや。
 見物の群集ぐんじゆはこれに先を追はれて、山男を一人残いた儘、
 見る見る四方へ遠のいてしまつた。ぢやによつて「れぷ

ろぼす」は、大象の足にまがはうずしたたかな手を大地について、御輦の前に頭を下げながら、

「これは『れぷろぼす』と申す山男でござるが、唯今『あんちおきや』の帝は、天下無双の大將と承り、御奉公申さうずとて、はるばるこれまでまかり上つた。」と申し入れた。これよりさき、帝の同勢も、「れぷろぼす」の姿に胆きもをけして、先手は既に槍薙刀なぎなたの鞘さやをも払はうずけしきであつたが、この殊勝な言ことばを聞いて、異心もあるまじいものと思ひつらう、とりあへず行列をそこに止めて、供頭ともがしらの口からその趣をしかじかと帝へ奏聞そうもんした。

帝はこれをきこし召されて、

「かほどの大男のことなれば、一定武勇も人いちぢやうに超えつらう。召し抱へてとらせい。」と、仰せられたれば、格別の詮議とあつて、すぐさま同勢の内へ加へられた。「れぷろぼす」の悦びは申すまでもあるまじい。ぢやによつて帝の行列の後から、三十人の力士もえか昇くまじい長櫃ながびつととさを十棹の宰領を承つて、ほど近い御所の門まで、鼻たかだかと御供仕つた。まことこの時の「れぷろぼす」が、山ほどな長櫃を肩にかけて、行列の人馬を目の下に見下しながら、大手をふつてまかり通つた異形奇体いぎやうの姿こそ、

目ざましいものでおぢやつたらう。

さてこれより「れぷろぼす」は、うるしもん漆紋のあさがみしも麻袴に朱

鞘の長刀を横たへて、朝夕「あんちおきや」の帝の御

所を守護する役者の身となつたが、さいわひ幸ここに功名手が

らをあらは顕さうず時節が到来したと申すは、ほどなく隣国

の大軍がこの都を攻めとらうと、一度に押し寄せて参つ

たことぢや。元来この隣国の大将は、獅子王をも手打ち

にすると聞えた、ばんぷ万夫不当のたう剛の者でおぢやれば、「あ

んちおきや」の帝とても、なほざりの合戦はなるまじい。

ぢやによつて今度の先手は、さきて今まゐりながら「れぷろぼ

す」に仰せつけられ、帝は御自おんみづから本陣に御輦ぎよれんをすすめて、号令を司つかさどられることとなつた。この采配を承つた「れぷろぼす」が、悦び身にあまりて、足の踏みども覚えなんだは、毛頭無理もおぢやるまい。

やがて味方も整へば、帝は、「れぷろぼす」をまつさきに、貝金陣太鼓かひがねの音も勇しう、国ざかひの野原に繰り出された。かくと見た敵の軍勢は、元より望むところの合戦ぢやによつて、なじかは寸刻もためらはう。野原を蔽おほうた旗差物が、俄にはかに波立つたと見てあれば、一度にどつと鬨とぎをつくつて、今にも懸け合はさうずけしきに見え

た。この時「あんちおきや」の人数の中より、一人悠々と進み出だいたは、別人でもない「れぷろぼす」ぢや。山男がこの日の出いで立ちは、水牛の兜えに南蛮鉄の鎧きを着おろ下きいて、刃渡り七尺の大薙刀を柄えみじかにおつとつたれば、さながら城の天主に魂が宿つて、大地も狭しと揺いぎ出だいた如くでおぢやる。さるほどに「れぷろぼす」は両軍の唯中に立ちはだかると、その大薙刀をさしかざいて、遙はるかに敵勢を招きながら、雷いかづちのやうな声で呼はつたは、「遠からんものは音にも聞け、近くばよつて目にも見よ。これは『あんちおきや』の帝が陣中に、さるものありと

知られたる『れぷろぼす』と申す剛の者ぢや。かたじけな辱く

も今日は先手の大将を承り、ここに軍を出いだいたれば、われと思はうずるものどもは、近う寄つて勝負せよやつ。」と申した。その武者ぶりの凄じさは、昔「ペりして」の豪傑に「ごりあて」と聞えたが、鱗綴うろことぢの大鎧あかがねに銅ほこの矛なりを提ひっさげて、百万の大軍を叱陀しったしたにも、劣るまじいと見えたれば、さすが隣国の精兵たちも、しばしがほどは鳴なりを静めて、出で合うずものもおりなかつた。ぢやによつて敵の大将も、この山男を討たいでは、かなふまじいと思ひつらう。美々しい物の具に三尺の太刀をぬきかざい

て、竜馬りゆうまに泡を食はませながら、これも大音に名乗りをあ
 げて、まつしぐらに「れぷろぼす」へ打つてかかった。
 なれどもこなたはものともせいで、大薙刀をとりのべな
 がら、二太刀三太刀あしらうたが、やがて得物をからり
 と捨てて、猿臂ゑんぴをのばいたと見るほどに、早くも敵の大
 将を鞍壺くらつぼからひきぬいて、目もはるかな大空へ、礫つぶての
 如く投げ飛ばいた。その敵の大將がきりきりと宙に舞ひ
 ながら、味方の陣中へどうと落ちて、乱離骨灰らりこつぱひになつた
 のと、「あんちおきや」の同勢が鯨波とぎの声を轟かいて、
 帝の御輦ぎよれんを中にとりこめ、雪崩なだれの如く攻めかかつたのと

が、間に髪かんをも入れまじい、殆ど同時の働きぢや。されば隣国の軍勢は、一たまりもなく浮き足立つて、武器馬具のたぐひをなげ捨てながら、四分五裂に落ち失うせてしまうた。まことや「あんちおきや」の帝がこの日の大勝利は、味方の手にとつた兜首かぶとくびの数ばかりも、一年の日数よりは多かつたと申すことでおぢやる。

ぢやによつて帝は御悦び斜ならず、目でたく凱歌の裡うちに軍いくさをめぐらされたが、やがて「れぷろぼす」には大名の位を加へられ、その上諸臣にも一々勝利の宴を賜つて、ねんごろに勲功をねぎらはれた。その勝利の宴を賜

つた夜のことと思召されい。当時国々の形儀かたぎとあつて、
 その夜も高名かうみやうな琵琶法師が、大燭台の火の下に節面白
 う絃げんを調じて、今昔いまむかしの合戦のありさまを、手にとる如
 く物語つた。この時「れふるぼす」は、かねての大願を
 成就したことでおぢやれば、涎よだれも垂れようずばかり笑
 み傾いて、余念もなく珍陀ちんたの酒を酌くみかはいてあつた所
 に、ふと酔うた眼にもとまつたは、錦の幔幕まんまくを張り渡い
 た正面の御座にわせられる帝みかどの異な御ふるまひぢや。
 何故と申せば、検校けんげうのうたふ物語の中に、悪魔ぢやまと云ふ言
 葉がおぢやると思へば、帝はあわただしう御手をあげて、

必ず十字の印しるしを切らせられた。その御ふるまひが怪けしからずものものしげに見えたれば、「れぷろぼす」は同席の侍に、

「何として帝は、あのやうに十字の印を切らせられるぞ。」と、卒爾そつじながら尋ねて見た所がその侍の答へたは、

「総じて悪魔ぢやぼと申すものは、天あめが下の人間をも掌たなごころにのせて弄もてあそぶ、大力量のものでおぢやる。ぢやによつて帝も、悪魔ぢやぼの障碍しやうげを払はうずと思召され、再三十字の印を切つて、御身を守らせ給ふのぢや。」と申した。「れぷろぼす」はこれを聞いて、迂論うろんげに又問ひ返したは、

「なれど今『あんちおきや』の帝は、天あめが下に並びない大剛の大將と承つた。されば悪魔ぢやぼも帝の御身には、一指をだに加へまじい。」と申ししたが、侍は首をふつて、「いや、いや、帝も、悪魔ぢやぼほどの御威勢はおぢやるまい。」と答へた。山男はこの答を聞くや否や、大いに憤つて申したは、

「それがしが帝に隨身し奉つたは、天下無双つはものの強者は帝ぢやと承つた故でおぢやる。しかるにその帝さへ、悪魔ぢやぼには腰を曲げられるとあるなれば、それがしはこれよりまかり出でて、悪魔ぢやぼの臣下と相成らうず。」と喚わめきなが

ら、ただちに珍陀の盃を抛なげうつて、立ち上らうと致いたれば、一座の侍はさらいでも、「れぷろぼす」が今度の功名を妬ねたましう思うて居つたによつて、

「すは、山男が謀叛むほんするわ。」と異口同音に罵ののり騒いで、やにはに四方八方から搦からめとらうと競ひ立つた。もとより「れぷろぼす」も日頃ならば、さうなくこの侍だちに組みとめられう筈もあるまじい。なれどもその夜は珍陀の酔ゑひに前後も不覚の体ていぢやによつて、しばしがほどこそ多勢を相手に、組んづほぐれつ、揉もみ合うても居つたが、やがて足をふみすべらいて、思はずどうとまるん

だれば、えたりやおうと侍だちは、いやが上にも折り重つて、怒り狂ふ「れぷろぼす」を高手小手に括り上げた。

帝もことの体たらくを始終残らず御覧ぜられ、

「恩を讐あだで返すにつくいやつめ。匆々土の牢へ投げ入れ

い。」と、大いに逆鱗げきりんあつたによつて、あはれや「れぷ

ろぼす」はその夜の内に、見るもいぶせい地の底の牢舎

へ、禁獄せられる身の上となつた。さてこの「あんちお

きや」の牢内に囚とらはれとなつた「れぷろぼす」が、その

後如何なる仕合せにめぐり合うたか、右の一条を知らう

ず方々は、まづ次のくだりを読ませられい。

三 魔往来のこと

さるほどに「れぷろぼす」は、未だ繩目いまもゆるされいで、土の牢の暗やみの底へ、投げ入れられたことでおぢやれば、しばしがほどは赤子のやうに、唯おうおうと声を上げて、泣き喚わめくより外はおりなかつた。その時いづくよりとも知らず、緋ひの袍ころもをまとうた学匠がくしやうが、忽然こつねんと姿を現あらはいて、やさしげに問ひかけたは、

「如何に『れぷろぼす』。おぬしは何として、かやうな

所に居るぞ。」とあつたれば、山男は今更ながら、滝のやうに涙を流いて、

「それがしは、帝に背き奉つて、そむ悪魔に仕へようずと申したれば、かやうに牢舎致されたのでおぢやる。おう、おう、おう。」と歎き立てた。学匠はこれを聞いて、再びやさしげに尋ねたは、

「さらばおぬしは、今もなほ悪魔に仕へようず望がおりやるか。」と申すに、「れぷろぼす」は頭かうべを豎たてに動かいて、

「今もなほ、仕へようずる。」と答へた。学匠は大いに

この返事を悦んで、土の牢も鳴りどよむばかり、からからと笑ひ興じたが、やがて三度やさしげに申したは、

「おぬしの所望は、近頃殊勝千万ぢやによつて、これよりただちに牢舎を赦ゆるいてとらさうずる。」とあつて、身にまとうた緋の袍を、「れぷろぼす」が上に蔽うたれば、不思議や総身の縛いましめは、悉ことごとくはらりと切れてしまった。山男の驚きは申すまでもあるまじい。されば恐る恐る身を起いて、学匠の顔を見上げながら、慇懃いんぎんに礼を為ないて申したは、

「それがしが繩目を赦いてたまはつた御恩は、生しやうじやうよ々世々

忘却つかまつるまじい。なれどもこの土の牢をば、何として忍び出で申さうずる。」と云うた。学匠はこの時又えせ笑ひをして、

「かうすべいに、なじかは難からう。」と申しも果^{はて}ず、やにはに緋の袍の袖をひらいて、「れぷろぼす」を小脇に抱^{かか}いたれば、見る見る足下が暗うなつて、もの狂ほしい一陣の風が吹き起つたと思ふほどに、二人は何時^{いつ}か宙を踏んで、牢舎を後に飄々^{へうへう}と「あんちおきや」の都の夜空へ、火花を飛^{とば}いて舞ひあがつた。まことやその時は学匠の姿も、折から沈まうず月を背負うて、さながら怪し

げな大蝙蝠おほかはほりが、黒雲の翼を一文字に飛行ひぎやうする如く見えた
と申す。

されば「れぷろぼす」は愈いよいよ胆いを消けいて、学匠もろとも中空を射る矢のやうに翔りながら、戦をのく声で尋ねた
は、

「そもそもごへんは、何人でおぢやらうぞ。ごへんほど
な大神通だいじんづうの博士は、世にも又とあるまじいと覚ゆる。」
と申したに、学匠は忽ち底気味悪いほくそ笑みを洩しな
がら、わざとさりげない声で答へたは、

「何を隠さう、われらは、天あめが下の人間を掌たなごころにのせ

て弄もてあそぶ、大力量の剛の者ぢや。」とあつたによつて、
 「れぷろぼす」は始めて学匠の本性が、悪魔ぢやぼぢやと申す
 ことに合点がてんが参つた。さるほどに悪魔ぢやぼはこの問答の間さ
 へ、妖霊星の流れる如く、ひた走りに宙を走つたれば、
 「あんちおきや」の都の燈火ともしびも、今ははるかな闇の底に
 沈みはてて、やがて足もとに浮んで参つたは、音に聞く
 「えじつと」の沙漠でおぢやらう。幾百里とも知れまじ
 い砂の原が、有明の月の光の中に、夜目にも白々と見え
 渡つた。この時学匠は爪長な指をのべて、下界をゆびさ
 しながら申したは、

「かしこの藁屋わらやには、さる有験うげんの隠者が住居すまひ致いたて居ると聞いた。まづあの屋根の上に下らうずる。」とあつて、「れぷろぼす」を小脇むねに抱いた儘、とある沙山陰すなやまのあばら家の棟むねへ、ひらひらと空から舞ひ下つた。

こなたはそのあばら家に行ひすまいて居つた隠者の翁おきなぢや。折おきなから夜のふけたのも知らず、油火あぶらびのかすかな光の下で、御経おんきやうを讀誦どくじゆし奉つて居つたが、忽たちまちえならぬ香風が吹き渡つて、雪にも紛まがはうず桜の花が紛々とひるがへ翻ひるがへり出いだいたと思へば、いづくよりともなく一人の傾城けいせいが、鼈甲べつかふの櫛くし笄かうがいを円光の如くさしないて、地獄絵を繡ぬ

うたうちかけ襠もすその裳を長々とひきはえながら、天女のやうな
 媚を凝こらして、夢かとはばかり眼の前へ現れた。翁はさなが
 ら「えじつと」の沙漠が、片時の内に室神崎しつかんざきの廓くるわに変
 つたとも思ひつらう。あまりの不思議さに我を忘れて、
 しばしがほどは惚々ほれぼれと傾城けいせいの姿を見守つて居つたに、相
 手はやがて花吹雪を身に浴びながら、につこと微笑ほほゑんで
 申したは、

「これは『あんちおきや』の都に隠れもない遊びでおぢ
 やる。近ごろ御僧のつれづれを慰めまゐらせうと存じた
 れば、はるばるこれまでまかり下つた。」とあつた。そ

の声ざまの美しさは、極楽に棲すむとやら承つた伽陵頻伽かりようびんが
 にも劣るまじい。さればさすがに有う驗げんの隠者いんしやもうかこそ
 の手に乗らうとしたが、思へばこの真夜中に幾百里とも
 知らぬ「あんちおきや」の都から、傾城けいせいなどの来よう筈
 もおぢやらぬ。さては又しても悪魔ぢやまめの悪巧みであらう
 ずと心づいたによつて、ひたと御経に眼を曝さらしながら、
 専念ぜんねんに陀羅尼だらにを誦ずし奉つて居つたに、傾城はかまへてこ
 の隠者の翁を落さうと心にきはめつらう。蘭麝らんじやの薫を漂
 はせた綺羅きらの袂もてをあそびながら、嫋々たよたよとしたさまで、さ
 も恨めしげに歎いたは、

「如何に遊びの身とは申せ、千里の山河も厭いとはいで、この沙漠までまかり下つたを、さりとは曲きよくもない御方かな。」と申した。その姿の妙たへにも美しい事は、散りしく桜の花の色さへ消えようずると思はれたが、隠者の翁は遍身へんしんに汗を流いて、降魔の呪文を読みかけ読みかけ、かつふつその悪魔ぢやぼの申す事に耳を借さうず気色けしきすらおりない。されば傾城かたむねもかくてはなるまじいと気を苛いらだつたか、つと地獄絵の裳もすそをひるがへ翻ひるがへして、斜に隠者の膝へとすがつたと思へば、

「何としてさほどつれないぞ。」と、よよとばかりに泣

い口説くどいた。と見るや否や隠者の翁は、蝎さそりに刺されたやうに躍り上つたが、早くも肌身につけた十字架くゑすをかざいて、霹靂はたたがみの如く罵ののしつたは、

「業畜ごふちく、御主おんあるじ『えす・きりしと』の下部しもべに向つて無礼むらいあるまじいぞ。」と申しも果てず、てうと傾城の面おもてを打つた。打たれた傾城は落花の中に、なよなよと伏しまろんだが、忽ちその姿は見えずなつて、唯一むらの黒雲が湧き起つたと思ふほどに、怪しげな火花の雨が礫つぶての如く乱れ飛んで、

「あら、痛や。又しても十字架くゑすに打たれたわ。」と唸うめく

声が、次第に家の棟にのぼつて消えた。もとより隠者はかうあらうと心に期ごして居つたによつて、この間も秘密の真言しんごんを絶えず声高こわだかに誦ずし奉つたに、見る見る黒雲も薄ければ、桜の花も降らずなつて、あばら家の中には又もとの如く、油火ばかりが残つたと申す。

なれど隠者は悪魔ぢやぼの障碍しやうげが猶もあるべいと思つたれば、夜もすがら御経の力にすがり奉つて、目蓋まぶたも合はさいで明あかいたに、やがてしらしら明けと覺しい頃、誰たれやら柴の扉とほそをおとづれるものがあつたによつて、十字架くるすを片手に立ち出でて見たれば、これは又何ぞや、藁屋の前

に蹲うづくまつて、恭うやうやしげに時儀じぎを致いたいて居ゐつたは、天から降くだつたか、地あけから湧あいたか、小山のやうな大男ぢや。それが早くも朱あけを流ながした空を黒々と肩にかぎつて、隠者の前に頭を下くだげると、恐おそる恐おそる申まをしたは、

「それがしは『れぷろぼす』と申す『しりや』の国の山男やまおとこでおぢやる。ちかごろふつと悪魔ぢやまの下部しもべと相成あひなつて、はるばるこの『えじつと』の沙漠さばくまで参まゐつたれど、悪魔ぢやまも御主おんあるじ『えす・きりしと』とやらんの御威光ごゐこうには叶あひ難がたく、それがし一人を残のこし置いて、いづくともなく逐天ちくてん致いたした。自体みづかそれがしは今天けふが下に並ならびない大剛たいこうの者を

尋ね出して、その身内に仕へようずる志がおぢやるによつて、何とぞこれより後は不束ふつつかながら、御主『えす・きりしと』の下部の数へ御加へ下されい。」と云うた。隠者の翁はこれを聞くと、あばら家の門に佇みながら、俄に眉をひそめて答へたは、

「はてさて、せんない仕宜しぎになられたものかな。総じて悪魔ぢやぼの下部となつたものは、枯木に薔薇の花が咲かうずるまで、御主『えす・きりしと』に知遇し奉る時はござない。」とあつたに、「れぷろぼす」は又ねんごろに頭を下げて、

「たとへ幾千歳を経ようずるとも、それがしは初一念を貫かうずと決定けつちやう致いた。さればまづ御主『えす・きりしと』の御意みこころに叶ふべい仕業の段々を教へられい。」と申した。所で隱者の翁と山男との間には、かやうな問答がしかつめらしうとり交されたと申す事でおぢやる。

「ごへんは御経おんきやうの文句を心得られたか。」

「生憎あいにく一字半句の心得もござない。」

「ならば断食は出来申さうず。」

「如何なこと、それがしは聞えた大飯食ひでおぢやる。中々断食などはなるまじい。」

「難儀かな。夜もすがら眠らいで居る事は如何あらう。」
 「如何なこと、それがしは聞えた大寝坊でおぢやる。中々
 眠らいでは居られまじい。」

それにはさすがの隠者の翁も、ほとほと言ことばのつぎ穂
 さへおぢやらなんだが、やがて掌たなごころをはたと打つて、
 したり顔に申したは、

「ここを南に去ること一里がほどに、流沙河りうさがと申す大河
 がおぢやる。この河は水嵩みづかさも多く、流れも矢を射る如く
 ぢやによつて、日頃から人馬の渡りに難儀致すとか承つ
 た。なれどごへんほどの大男には、容易たやすく徒渉かちわたりさへな

らうずる。さればごへんはこれよりこの河の渡し守となつて、往来の諸人を渡させられい。おのれ人に篤あつければ、天主も亦おのれに篤あつからう道理ことわりぢや。」とあつたに、大男は大いに勇み立つて、

「如何にも、その流沙河とやらの渡し守になり申さうずる。」と云うた。ぢやによつて隠者の翁も、「れぷろばす」が殊勝な志をことの外悦よろこんで、

「然さらば唯今、御水おんみづを授け申さうずる。」とあつて、おのれは水瓶をかい抱きながら、もそもそと藁家の棟へ這ひ上つて、漸く山男の頭の上へその水瓶の水を注ぎ下い

た。ここに不思議がおぢやつたと申すは、とくとど得度の御儀式
 が終りも果てず、折からさし上つた日輪の爛々らんらんと輝いた
 真唯中から、何やら雲気がたなびいたかと思へば、忽ち
 それが数限りもないしじふから四十雀の群となつて、空に聳えた「れ
 ぷろぼす」がくさむら叢ほどの頭の上へ、ばらばらと舞ひ下つ
 たことぢや。この不思議を見た隠者の翁は、思はず御水
 を授けようず方角さへも忘れはてて、うつとりと朝日を
 仰いで居つたが、やがてうやうや恭しく天上を伏し拜むと、家
 の棟から「れぷろぼす」をさし招いて、
 「勿もつたい体なくも御水を頂かれた上からは、
 向後かうご『れぷろぼ

す』を改めて、『きりしとほろ』と名のらせられい。思ふに天主もごへんの信心を深う嘉よみさせ給ふと見えたれば、万ごんぎやう一勤行に懈怠けたいあるまじいに於ては、必ひつぢやう定遠からず御主『えす・きりしと』の御尊体をも拝み奉らうずる。」と云うた。さて「きりしとほろ」と名を改めた「れぷろぼす」が、その後如何なる仕合せにめぐり合うたか、右の一条を知らうず方々はまづ次のくだりを読ませられい。

四 往生のこと

さるほどに「きりしとほろ」は隠者の翁に別れを告げて、流沙河のほとりに参つたれば、まことに濁流滾々こんこんとして、岸べの青蘆あをあしを戦そよがせながら、百里の波を翻すありさまは、容易たやすく舟さへ通ふまじい。なれど山男は身の丈凡およそ三丈あまりもおぢやるほどに、河の真唯中を越す時さへ、水は僅に臍ほぞのあたりを渦巻きながら流れるばかりぢや。されば「きりしとほろ」はこの河べに、ささやかながら庵いほりを結んで、時折渡りに難なやむと見えた旅人の影が

眼に触れれば、すぐさまそのほとりへ歩み寄つて、「これはこの流沙河の渡し守でおぢやる。」と申し入れた。もとより並々の旅人は、山男の恐しげな姿を見ると、如何なる天魔てんま波旬はじゆんかと始はじめは胆も消けいて逃げのいたが、やがてその心根のやさしさもとくと合点行つて、「然らば御世話ごせわに相成らうず。」と、おづおづ「きりしとほろ」の背せなにのぼるが常ぢや。所で「きりしとほろ」は旅人を肩へゆり上げると、毎時いづもも汀みぎはの柳を根こぎにしたしたかな杖をつき立てながら、逆巻く流れをこともせず、ざんざんざんざんと水を分けて、難なく向うの岸へ渡いた。

しかもあの四十雀は、その間さへ何羽となく、さながら
 楊花やうくわの飛びちるやうに、絶えず「きりしとほろ」の頭を
 めぐつて、嬉しげにさへづ嘖りかは交いたと申す。まことや「き
 りしとほろ」が信心の辱かたじけなさには、無心の小鳥も随喜
 の思にえ堪へなんだのでおぢやらうず。

かやう致いて「きりしとほろ」は、風雨も厭はず三年
 が間、渡し守の役目を勤めて居つたが、渡りを尋ねる旅
 人の数は多うても、御主「えす・きりしと」らしい御姿
 には、絶えて一度も知遇せなんだ。が、その三年目の或
 夜のことに、折から凄じい嵐があつて、神鳴りさへおどろ

と鳴り渡つたに、山男は四十雀と庵を守つて、すぎこし方のことどもを夢のやうに思ひめぐらいて居つたれば、忽ち車軸を流す雨を圧して、いたいけな声が響いたは、

「如何に渡し守はおりやるまいか。その河一つ渡して給はれい。」と、聞え渡つた。されば「きりしとほろ」は身を起いて、外の闇夜へ揺ぎ出いだいたに、如何なこと、河のほとりには、年の頃もまだ十には足るまじい、みめ清らかな白衣びやくえのわらんべが、空をつんざいて飛ぶ稲妻の中に、頭を低たれて唯ひとり、佇んで居つたではおぢやるまいか。山男は稀有けうの思をないて、千引ちびきの巖にも劣るまじ

い大の体をかがめながら、慰めるやうに問ひ尋ねたは、「おぬしは何としてかやうな夜更けにひとり歩くぞ。」と申したに、わらんべは悲しげな瞳をあげて、

「われらが父のもとへ歸らうとて。」と、もの思はしげな声で返答した。もとより「きりしとほろ」はこの答を聞いても、一向不審は晴れなんだが、何やらその渡りを急ぐ容子ようすがあはれにやさしく覺えたによつて、

「然らば念無う渡さうずる。」と、もろて双手にわらんべをか抱いて、日頃の如く肩へのせると、例の太杖をてうとついで、岸べの青蘆を押し分けながら、嵐に狂ふ夜河の

中へ、胆太くもざんぶと身を浸したいた。が、風は黒雲を巻
 き落いて、息もつかすまじいと吹きどよもす。雨も川面かはづら
 を射い白しらまいて、底にも徹とほらうずばかり降り注いだ。時折
 闇をかいて破る稲妻の光に見てあれば、浪は一面に湧き立
 ち返つて、宙に舞上る水煙も、さながら無数の天使あんぢよたち
 が雪の翼をはためかいて、飛びしきるかとも思ふばかり
 ぢや。さればさすがの「きりしとほろ」も、今宵はほと
 ほと渡りなやんで、太杖にしかとすがりながら、礎いしずゑの
 朽ちた塔のやうに、幾度いくたびもゆらゆらと立ちすくんだが、
 雨風よりも更に難儀だつたは、怪けしからず肩のわらんべが

次第に重うなつたことでおぢやる。始はそれもさばかりに、え堪へまじいとは覚えなんだが、やがて河の真唯中へさしかかつたと思ふほどに、白衣のわらんべが重みはいよいよま愈増あたかいて、今はだいばんじやく恰も大磐石を負ひないてゐるかおとと疑はれた。所で遂には「きりしとほろ」も、あまりの重さにしよせん押し伏されて、所詮はこの流沙河に命を殞すべいと覺悟したが、ふと耳にはいつて来たは、例の聞き慣れた四十雀の声ぢや。はてこの闇夜に何として、小鳥が飛ぼうぞといぶか訝りながら、頭をもた擡げて空を見たれば、不思議やわらんべの面をめぐつて、三日月ほどな金光がさんらん燦爛とまる円

く輝いたに、四十雀はみな嵐をもものともせず、その金光のほとりに近く、紛々と躍り狂うて居つた。これを見た山男は、小鳥さへかくは雄々しいに、おのれは人間と生まれながら、なじかみとせは三年の勤行ごんぎやうを一夜に捨つべいと思ひつらう。あの葡萄蔓えびかづらにも紛はうず髪をさつさつと空に吹き乱いて、寄せては返す荒波に乳のあたりまで洗はせながら、太杖も折れよとつき固めて、必死に目ざす岸へと急いだ。

それが凡そ一時ひとときあまり、四苦八苦の内に続いたでおぢやらう。「きりしとほろ」は漸く向うの岸へ、戦ひ疲れ

た獅子王のけしきで、喘あへぎ喘あへぎよろめき上ると、柳の太杖を砂にさいて、肩のわらんべを抱き下しながら、吐息を ついて申したは、

「はてさて、おぬしと云ふわらんべの重さは、海山うみやま量はかり知れまじいぞ。」とあつたに、わらんべはにつこと微笑ほほえんで、頭上の金光を嵐の中に一きは燦然ときらめかいながら、山男の顔を仰ぎ見て、さも懐しげに答へたは、

「さもあらうず。おぬしは今宵と云ふ今宵こそ、世界の苦しみを身に荷になうた『えす・きりしと』を負ひないたのぢや。」と、鈴を振るやうな声で申した。……

その夜この方流沙河のほとりには、あの渡し守の山男
 がむくつけい姿を見せずなつた。唯後に残つたは、向う
 の岸の砂にさいた、したたかな柳の太杖で、これには枯
 れ枯れな幹のまはりに、不思議や麗うるはしい紅くれなゐの薔薇の
 花が、薰かぐはしく咲き誇つて居つたと申す。されば馬太またいの
 御経おんきやうにも記しるいた如く「心の貧しいものは仕合せぢや。
 一定いちぢやう天国はその人のものとならうずる。」

(大正八年四月)

日本文学電子図書館

きりしとほろ上人伝

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系43 芥川龍之介集
筑摩書房

昭和43年8月25日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館